

タイトル:平成 28(2016)年度 教育セミナー(第 12 回)

日時:2016 年 9 月 18 日(日)~21 日(水)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「イスラーム経済から資本主義を考える」

長岡 慎介(京都大学)

イスラームの理念にもとづいた実行可能な経済システムを現代世界に(再)構築しようとする「イスラーム経済」は、20 世紀半ばから知的探究が始まり、1970 年代のイスラーム銀行の設立を契機に商業実践が本格化した。現在、金融に加えて、食品、日用品、ファッション、ツーリズムまで様々な産業にその裾野が広がっており、グローバル経済におけるプレゼンスも高まっている。

本講義では、私たちが馴染んでいる近代資本主義を相対化する視角から、特にイスラーム金融の実践とそれを支える理念の独自性に着目して、近代資本主義の普遍性を再検討することを試みた。そして、近年見られるようになったイスラーム経済の新たな挑戦を紹介し、近代資本主義に代わる地球社会の新たな経済パラダイムの構築に、イスラーム経済がいかに貢献しうるかを考えた。

イスラーム金融における利子の禁止は、イスラームの経済理念のうち最もよく知られているものである。イスラーム法学者と金融実務家は、利子を取らない金融商品の開発に力を注いできた。しかし、イスラーム金融に懐疑的な人々からは、この利子禁止規定が本当に守られているのだろうか、利子という言葉を使わずに利子のようなものを取っているだけではないだろうかという批判がしばしば寄せられている。たしかに、いくつかの金融商品のしくみを見ると、利子のようなものが介在しているようにも見える。はたして、この利子のようなものが、私たちがあって当然だと考えている利子と同じなのか。この講義では、この問いを手がかりに、イスラームにおける禁じられる利子と認められる利得の分水嶺が何であるかを、1) イスラームにおける利子禁止の構造分析、2) 利子が疑われる金融商品めぐる法学論争の読み解きという 2 つの観点から解明することを試みた。

これらの考察からは、イスラームでは、禁じられる利子と認められる利得の間には大きな断絶があり、イスラーム金融商品に見られる利子のようなものは、あくまでも認められる利得の範疇に含まれるものであることがわかった。それを私たちが利子のようなものだと考えてしまうのは、「金融システムには利子の存在が自明だ」という常識に囚われているからだ結論づけた。近代以前の歴史を振り返ると、イスラームと同様に、利子に依らない金融取引が世界各地で実践されており、このことから利子をベースとする経済システムは、必ずしも人類史を貫く普遍的なものではなく、近代資本主義によって「常識化」したに過ぎないものであることを指摘した。

講義の後半では、講師がここ数年フィールドワークを続けているシンガポールにおけるイスラーム金融を用いたワクフの再生プロジェクトを紹介し、最先端の金融と伝統的イスラーム制度が結びつくことで、これまでばらばらに取り組みされていたイスラーム経済の実践が有機的に(再)統合しようとするダイナミズムを描いた。そして、この新たな挑戦が地球社会の新たな経済パラダイムの構築に資する可能性について問題提起を行った。